

# キリシタン版漢字辞書の書名をめぐる

——『落葉集』、その書名に対する疑問——

漆 崎 正 人

## 一 はじめに

室町末期に来日したカトリックのイエズス会宣教師たちが、日本語表記に用いられる漢字の単字や熟字の読み書きを修得するために、日本人修道士たちの協力のもとに編纂し、一五九八年に刊行したキリシタン版の漢字辞書は、今日まで一貫して『落葉集』と呼ばれてきた。このキリシタン版の漢字辞書——以下、所謂『落葉集』を本稿では便宜上『キリシタン版字書類聚』（略称『字書類聚』と呼んでおくことにする——の現存伝本は、断簡を除くと、①ローマイエズス会本部文庫蔵本、②大英図書館蔵本、③イギリススクロフォード家蔵本、④天理図書館蔵本、⑤パリ国立図書館蔵本、⑥ライデン大学図書館蔵本がある。『キリシタン版字書類聚』は、字音引の『落葉集』（六二葉）、字訓引の『色葉字集』（二三葉）、——『色葉字集』の後に付録としての「百官并唐名之大概」「日本六十餘州」（計四葉）以下、本稿では両者を合せて「付録」と呼ぶ）、字形引の「小

玉篇」の三篇から成ると言えるが、伝本の⑤⑥には「小玉篇」が欠けている。「小玉篇」を有しない伝本があり、伝本②③④の「付録」の「日本六十餘州」の終りに刊年が示されていることや、扉裏の「序」では字音引篇や字訓引篇についてのみ述べ、「小玉篇」に関する言及が全くなく、その一方で「小玉篇之目錄」の直前に「小玉篇」のための序が付されていることにより、この『字書類聚』は、まず「落葉集」と「色葉字集」（及び「付録」）との二篇による刊行が企図され、後に「小玉篇」を加えることに変更され出版されたと考えられている。私見では、「付録」が、「色葉字集」の直後にあるもの、独立した丁付けを有するなど、「落葉集」「色葉字集」と対等の取り扱いであり、内容的にも「付録」の官名や地名の多くは「落葉集」「色葉字集」とに存するものであること<sup>※</sup>から、単なる「色葉字集」の付録ではなく「落葉集」「色葉字集」両篇の締め括りの付録として二篇目の末に置かれているということも根拠の一つと思われる。

このように、『字書類聚』が三篇乃至二篇構成であったにもかかわらず

らず、『落葉集』という名称で従来呼ばれてきたのは、何よりもって、一般に書名が著されていることが期待される、本書の扉において上段に「RACVYOVXV」(落葉集)というタイトルが印刷されており、そして裏面の「序」に「仍此一冊を落葉集と号す」と記されていることによると考えられる。

そのため、『落葉集』という名称は、全体の書名と、字音引篇の篇名との両方を指すこととなり、両者を区別する必要が生じた。両者の区別にあたっては、例えば、字音引篇、字訓引篇を、『国語史辞典』(一九七九年、東京堂出版)「落葉集」の項では、それぞれ『落葉集』、『落葉集』とし、杉本つとむ著『ライデン大学図書館蔵落葉集 影印と研究』(一九八四年、ひたく書房)の「落葉集」(RACVYOVXV)の考察においては、それぞれ『落葉集』、『落葉集』としていうように、困い込む記号の違いで使い分けたり、『日本古辞書を学ぶ人のために』(一九九五年、世界思想社)「落葉集」の項で、字音引篇を「音別いろは」と名付けるといように別称で呼ぶことによって峻別しようとしたり、『古語大辞典』(一九八三年、小学館)付録「日本の古辞書」の「落葉集」の項のように、字音引篇を、置かれた順序に基づき「第一篇」と単に呼んで区別しようとするものなどもあるが、通常は、例えば、『日本語学研究事典』(二〇〇七年、明治書院)「落葉集」の項に、「全一〇八葉 本篇<sub>上</sub>二葉、色葉字集<sub>上</sub>二七葉、小玉篇<sub>上</sub>一九葉の三部に分かれている。」とあるように、字音引篇を主要部分と見做し「本篇」乃至「落葉集本篇」と呼んでいる。字音引

篇に対する「落葉集本篇」という呼称は、実に、『字書類聚』を紹介したものとしては、極めて早い時期の、新村出『落葉集』(国学院雑誌)一六卷七号、一九一〇年七月)に、

今予は此字書の組織を(一)「落葉集本篇」、(二)「色葉字集」、(三)「官名並に国名」、(四)「小玉篇」の四部に分けて各部の要略を解説せんとす。

と用いられているのが見い出される。

本稿は、従来呼び馴らしてきた『落葉集』という書名、及び字音引篇の呼称をめぐって考察するものである。

## 二 『字書類聚』字音引篇の呼称について

まず、『キリシタン版字書類聚』字音引篇の篇名が、「落葉集」であること自体は疑う余地がない。字音引篇の最終行に『落葉集終』とあり、それに引き続いて『右落葉集之違字』の見出しのもとに字音引篇における誤植だけを掲載していること、さらに、『字書類聚』第三篇にあたる字音引篇の「小玉篇」の序には、『右落葉集は字のこゑを用ひていろはをついで色葉字集はよみを以て記すれば……右両篇の内より』と述べており、これらの『落葉集』の名称は、字訓引篇の「色葉字集」と対を成すところの字音引篇についての呼称として用いられていることは明らかである。

なお、「色葉字集」という名称が、字訓引篇の最終行に『色葉字集

之終」とあり、続いて「右色葉字集之違字少ミ」の見出しを立て字訓引篇の誤植を一括して掲げており、この行き方が字音引篇の場合と殆ど変わらないことからすれば、字訓引篇第一葉一行目には唯一記されてあるタイトル「色葉字集」が字訓引篇名である以上、字音引篇第一葉一行目に同様に記されてあるタイトル「落葉集」も字音引篇の呼称として記されたものと解するのが自然であろう。

「落葉集」が字音引篇の呼称として「字書類聚」で実際に用いられているからには、この名称が同時に書名をも指すとすれば、両者の区別が必要になってくるのは確かである。字音引篇を「落葉集」以外の別の名称でもって呼ぶとすれば、その呼称が相応しいかどうかの問題となる。

字音引篇の呼称として、「音別いろは」や「第一篇」は、字音引篇の構造の特徴やその位置に基づいて用いられているという点では、「落葉集」を篇名としての使用を避けなければならないとすれば、無難な処置と言えなくはない。

次に、字音引篇を「落葉集」本篇と呼ぶことについて検討しよう。字音引篇の名称として、「落葉集」本篇を採用していることが圧倒的に多いにもかかわらず、そう呼ぶことの理由に触れたものは非常に少ない。『日本辞書辞典』（一九九六年、おうふう）「落葉集」の項には、

落葉集本篇は「先達のもてあそびし文字言句の落索を拾ひあつめ」、「色葉集の跡を追ひひろはの次第をまなで」（序文）作ら

れた字音引の字書である。この部分が全体の半分以上を占め、中心となっているので全体の名称にも用いられている。全体の名称と区別してこの部分のみを指す場合には落葉集本篇と言いならわされている。

と、字音引篇が分量的に本書の過半を占め中心をなしているので、字音引篇名の「落葉集」が書名にも兼用されるように至ったと述べているが、この説明は同時に字音引篇を「落葉集」本篇と呼ぶ理由の説明ともなっているわけである。実は、この叙述は、次に引く土井忠生氏の見解（『四 落葉集』の「三 前篇の組織」『吉利支丹語学の研究 新版』（一九七二年、三省堂）所収他）を踏まえてのものである。

落葉集と名づけたのは、字音引の構成を持つ最初の部分であるが、これは最初に置かれてあるばかりでなく、全体の半ば以上分量を占め、この字書の中心をなすので、この部分に対する名称を全体に及ぼしたのである。そこで、全体の書名と区別して、字音引の部分のみを指す場合に落葉集本篇と呼ぶことにする。

土井氏は、字音引篇が「最初の部分である」うえに、「全体の半ば以上の分量を占め」ていることをもって、「この字書の中心をなす」と見做して「落葉集」が篇名からさらに書名にも及んだと解しているために、字音引篇を「落葉集本篇」と呼んでいるのである。

キリシタン版において、「本篇」に相当する名称は、他には「日葡

辞書』(一六〇三—四年)で用いられている。『日葡辞書』は、まず「本篇」のみで、一六〇三年に刊行され、翌年「補遺」がさらに附加されて刊行されたものであるが、「補遺の前書」及び「補遺のあとがき」のポルトガル語説明文中に、次のように「本篇」を意味する *corpo* が使われている。

*Aduira o leitor que esta estrelinha \* nos lugares onde se achar, significa, que aquellos vocabulos posto que estão impressos no corpo do Vocabulario, todavia ou selhes acrecenta algum outro sentido, ou se emmenda nelles alguma cousa, ou se declara melhor.* (訳: 読者に以下のことを注意しておく。見出し語に見られる星印\*は、それが辞書の本篇にも印刷されているが、それに別のある語義を付加するか、あることを訂正するか、あるいは、説明をよりよくするかしたことを示すものである。)

*No fim desta obra pareceo aduertir ao leitor, que quando neste Suplemento se diz: Vide tal palavra. l. Idem quod tal palavra. c. se deve buscar ou no mesmo Suplemento, ou no corpo do Vocabulario.* (訳: この著作の最後に、読者に注意しておきたいことがある。この補遺に「この語を見よ」とか、「この語に同じ」などとなる場合には、この補遺自体か、あるいは、本篇かについてこの語を探さなければならない。)

『日葡辞書』における「本篇」が分量的に全体の八割以上を占めている

ことは然ることながら、『日葡辞書』の編集自身が、大部な前篇を「本篇」とし、「本篇」に続く後篇部分をまさに「本篇」を補う「補遺」(suplemento)と明確に呼んでいるのである。

しかしながら、『字書類聚』においては、字音引篇が最初に置かれ、全体の半ば以上の分量を占めているとはいえず、編集自身は「本篇」に相当する表現は一切使用していない。「本篇」という捉え方は、近代以降の研究者の推定に他ならないのである。分量的に過半を有することが、質の面においても主であることに直結しているとは限らないのである。

では、字音引篇は、質の面においても中心を成すと認めることができるのであろうか。『字書類聚』の「序」の全文を引くと、  
 是つらの字書世にふりておほしといへども、あるは字のこゑばかりにしてよみなく、或いはよみをしるしてこゑを記せず。是なんもの、不足といふべきにや。茲に先達のもてあそびし文字言句の落案を拾ひあつめ、かしらに母字を置き、それにつゞく字を下にならべて、字の音声を右に記し読を左にして、色葉集の跡を追ひひろはの次第をまなんで以て字書をつくる。仍此一冊を落葉集と号す。又此書の終には一字くのみを本とし、おなじく二三字の世話をも少々相加へて、今一篇のいろはをわいいづる者也。凡可謂万戸之賜歟。

とあり、字音引篇及び字訓引篇に対する序となつている。この「序」では、当時の日本の字書には掲出漢字に対して字音か字訓かのどち

らか一方しか記していないことの不満を述べ、それを解消するものとして、漢字の右に字音、左に字訓を施し、字音のイロハ順で熟字を並べた「落葉集」と、字訓（のイロハ順）で引く「いろは」を作ると説明している。ヨーロッパ人宣教師にとって同音異義語が多い日本語語彙を適切に漢字表記するうえで、他と識別して特定するために、字音語は勿論、字訓語にしても、字音と字訓との両方が必要だったからである。この「序」においては、字音引篇「落葉集」と比べると、字訓引篇「色葉字集」についての言及が短く、篇名も明示されていないことが気になるのであるが、恐らく、この「序」が書かれる段階では、所収延べ字数が多く最初に着手することになった字音引篇「落葉集」は編集が着実に進められていたのである。が、第二篇となる字訓引篇の方は篇名も決まっていなく、まだ殆ど編集作業に入っていない状態だったからではなからうか。というのも、「小玉篇」のために添えられた序には、次にあるように、字訓引篇は「色葉字集」と明記されているばかりでなく、扱い方も、字音引篇の「落葉集」と全く対等になっている。

右落葉集は字のこゑを用ひていろはをついで、色葉字集はよみを以て記すれば、読こゑを知て字のすがたをしらざる時の所用をなすといへども、文字のかたちを見て其よみこゑをしるに道なき便として、右両編の内より今又此せばき玉篇をのみ。

『字書類聚』内での、字音引篇、字訓引篇の扱われ方もほぼ対等と言つてよい。まず、両篇は、それぞれ、丁付けに関して独立している。

両篇の形式上の進め方は、字音引篇は、第一葉第一行にタイトル「落葉集」だけがあり、本行最終葉終行に「落葉集終」とあり、次行に「右落葉集之違字」と見出しを立て誤植を並べて終了しているのに対し、字訓引篇は、第一葉一行目にタイトル「色葉字集」とのみあって、本行最終葉終行に「色葉字集之終」とあり、次葉一行目に「右色葉字集之違字少ミ」と見出しを掲げ誤植を一括して掲載して終了しており、両篇は殆ど同様の運び方なのである。また、「色葉字集」の後に置かれた「付録」は、これもまた独立した丁付けを有し、掲載官名と地名の多くは両篇に採られたものであり、両篇の締め括りとなっている。

そもそも、ヨーロッパ人宣教師にとって、漢字と字音と字訓の関係を理解することは、重要でかつ厄介なことであったことは、ロドリゲス『日本大文典』（二六〇四〜八年）の冒頭の「本文典の論述を理解し易からしめんが為の例言数則」の最初に、

一般の日本語は、すべてのことに、支那および日本を意味する「和、漢」(Va, Can)、又は「漢、和」(Can, Va)の二語によつて示される二通りの語がある。その一つは「こゑ」(Coye)と呼ばれて、支那語を意味する。他は「よみ」(Yomi)と呼ばれて、固有の日本語を意味する。かくして、日本語は、「こゑ」の混じらない本来の純粋な「よみ」であるか、「よみ」に少しく「こゑ」の混じたもので、すべての人に通用するものであるか、「こゑ」の多量に混じたもので、やや莊重

であり、日本人が普通には文書に用ゐ、重々しい身分の者とか学者とかが談話に用ゐるところのものであるか、純粹の「こゑ」のみのもので、最も晦渋であり、坊主が仏典の上で使ふところのものであるか、そのいづれかである。(土井忠生訳本(一九五五年、三省堂))

と取り上げ、さらに、第一巻の「日本語品詞論」において、「日本語の品詞に就いて」論述する前置きとして「日本語ですべてのものを呼び分ける「こゑ」と「よみ」の二種類に就いて」、五八丁裏〜五九丁表にかけて詳述していることから明らかである。

これまでの検討により、字音引篇の「落葉集」と字訓引篇の「色葉字集」とは、分量的にはともかく、質の面では、ほぼ対等の関係にあることがわかった。したがって、字音引篇の呼称として、「本篇」を用いることは適切ではないと言ふことができる。

### 三 『落葉集』という書名について

前節での考察から、『キリシタン版字書類聚』字音引篇の呼称として「本篇」が適さないことが確認されたが、このことは言い換えるると、本書の中心が字音引篇の「落葉集」であるがゆえに、その名称が書名に及んだとする根拠をも揺がすことになる。

前述したように、『字書類聚』の書名が『落葉集』と見做される最も端的な理由は、一般に書名が示されていることが期待される扉

に、本書の場合で言えば扉の上段に“RACVYOVXV”(落葉集)というタイトルが印刷されていること、しかも裏面の「序」に「仍此一冊を落葉集と号す」と記されていることであると思われるので、この二点に関して検討することにする。

第一に扉のタイトルについてであるが、扉のタイトルは常に書名と一致するのであるうか、種々のキリシタン版の中で、特に留意される、扉のタイトルを吟味する。

まず、『サントスの御作業の内抜書』(一五九一年)の扉には  
SANCTOS NO GOSAGVEONO VCHI NVOIGAQI quan  
dai ichi (サントスの御作業の内抜書巻第一)

とあり、書名というより所収巻名の次元のタイトルになっている。

一方、巻第二の扉には、

SANCTOS NO GO SAGVIO NO VCHI NVOIGA QI. (サン  
トスの御作業の内抜書)

とあって、こちらの方がむしろ書名に対応している。

次に、天草版の「平家物語」(一五九二年)・「伊曾保物語」(一五九三年)・「金句集」(一五九三年)の所収本では、扉に、

NIFON NO COTIBA TO Historia no narai xiran to  
FOSSRVFTO NO TAMENI XEVA NI YAVA RAG-  
VETARV FEIQE NO MONOGATARI. (日本の言葉やトス  
トリア(歴史)を習ひ知らんと欲する人のために世話に和らげ  
たる平家の物語)

とあって、最初に置かれてある「平家物語」の文献名になっている。扉の裏面には、次に引く、所収三篇にわたるの総序とついでにふきもの（以下「総序」と呼ぶことにする）が掲載されている。

Ono ychi quannia Nippono Feigetoyū Historiato, Morales Sentengasto, Europano Esopono Fabulasuo vosu mono nari. Xicareba coretano sacuxaua Gēto nite, sono daimocumo sanomi vomovomoxicarazaru gui narito miyuruto iyedomo, catqūa cotoba geicono tame, catqūa yono tocuno tame, coretano tagyuro xomotoo fanni firagu cotoua, Ecclesianivoite mezzuraxicarazaru gui nari. Cacunogotoqino quameua, Deusno gofōcūo cocorozaxi, sono Gloriano coinegōni ari. Xicareba cono Colleioni voite imamade fanni firagitaru qīdā coretano guini iquite sadamevocaruru fattono cocorotani vōjite xensacu xitaru gotoqu; cono ychibunomo Superiores yori sadametamō fiobitono xensacuvomotte fanni firagite yocaranto sadamerataru mono nari. Amacusani voite Feueretrono. 23 nichini coreno xosu. Toqini goxuxxeno nenqi. 1593. (この一巻には日本の平家とフランスの歴史)と、モラレス・センチンサス(道徳的な金言集)と、エウロパのエソポのハブラス(ヨーロッパのエソポの物語)を押す者也。然ればこれらの作者はセンチョ(異教徒)にして、その題目のみ重々しからざる儀也と見ゆべしと云ふが、且つち言

葉稽古のため、且うは世の徳のため、これらの類の書物を板に開くことは、エケレジャ(教会)において珍しからざる儀也。かくのごときの極めは、デウス(神)の御奉公を志し、そのゴラウリヤ(栄光)を希ふにあり。然ればこのコレジヨ(学林)において今まで板に開きたる経はこれらの儀にわたる定め置かるる法度の心あてに依じて穿鑿をしたる、ヤウ、この一部をもスベリヨレス(長老達)より定め給ふ人々の穿鑿以て板に開きて良からんと定められたる者也。天草において、ヘンレイロ(二月)の二十三日にこれを書す。時に御出世の年紀(一五九三)と云ふが、「総序」に続く二ページ分は、「Docujuno fironi taixite xosu.」(読誦の人に対して書す)という題の「平家物語」のための序があつて、次のページから「平家物語」の本文が始まつており、「総序」によつて「平家物語」は分断されている体をなしている。「平家物語」の本文の後の目録の最終ページ(「平家物語」の誤植の掲載を含む)の次に「伊曾保物語」の扉があり、それには、「ESOPONO FABVLAS.」(エソポのハブラス(物語))というタイトルが記われ、扉面には「伊曾保物語」のための序が「DOCVIYNO FITOYE TAIXITE XOSV.」(読誦の人に対して書す)の題のもとに置かれてある。次ページから「伊曾保物語」の本文となるが、本文の後の目録の最終ページ(「伊曾保物語」の誤植の掲載はない)の次のページは扉ではなく、そのページの上部に、

XIXO, XIXXO nadono vchiyori nuqi idaxi, qincuxūno nasu

mono nari. (四書、七書などのうちより抜き出し、金句集となす者也)

と記し、文献名「金句集」を示し、そのページから本文も始まり、本文最終ページの次ページに付録「GOIO」(五常)を載せている。そして、最後にこの文献集の付録として、「平家物語」と「伊曾保物語」についての難語句解、

CONO FIEIOE MOhogatario, Esopono Fabulasno vchimo  
funbet xinicugi cobohano yaurague. (一)の平家物語と「エソ  
ポのハブラス(物語)のうちの分別しにくき言葉の和らげ)

が添えられている。このように、この文献集には、キリシタン版中において、異質な構造をなしており、所収三文献の分野や内容及び運び方の違いから、一般的には、それぞれを独立した書と見做し、文献集全体が統一的に扱われることは殆どない。しかしながら、三文献を、且うは言葉稽古のため、且うは世の徳のため」という目的で括れるものとして「一卷」に収めたことを明言する「総序」があり、しかも三文献は独立したページ付けはされずに通しページになっていることや「和らげ」がそれぞれの文献ごとではなく「平家物語」と「伊曾保物語」とに関する難語句解として、「伊曾保物語」の直後ではなく第三文献の「金句集」の後にこの文献集の締め括りという位置付けで一括して掲載されていることを重視すれば、これは、各独立した三書の場合と合本・合冊本と捉えるべきではない。《言葉稽古》と《世の徳》の学びのために目的に適した三篇で

編まれた一書と解すべきである。なお、「総序」では、所収の三篇が、実際には「平家物語」「伊曾保物語」「金句集」の順なのに、「平家物語」「金句集」「伊曾保物語」の順で挙げ、そのうえ「金句集」はポルトガル語による内容の提示に留まっている点に注目すれば、第二篇、第三篇として、順序はともかく「伊曾保物語」と格言集(篇名未定)の採用が決まった段階で「総序」が作られたのかもしれない。どうであれ、「総序」がこの文献集における一書としてのまともを保証している以上、本書の扉のタイトルは書名ではなく、所収の第一篇「平家物語」の篇名であることになる。

次に、「倭漢朗詠集卷之上」、「九相歌并序」(「無常」を含む)、「雑筆抄」、「実語教」、「古状」、「直実状」、「返状」、「義経申状」の総称とする)、「勸学文」(「真宗皇帝勸学」)、「仁宗皇帝学勸」、「白樂天勸学文」(「朱文公勸学文」)、「柳屯田勸学文」、「王荊公勸学文」、「司馬温公勸学文」の総称とする)の六種の文献を所収するキリシタン版(一六〇〇年)について検討することにする。この文献集は、「倭漢朗詠集卷之上」、「倭漢朗詠集」、「朗詠雜筆」などと呼ばれ、書名は一定していない。書名として、「倭漢朗詠集卷之上」を採用する土井忠生氏は、「倭漢朗詠集卷之上」解題(「慶長五年耶穌会板倭漢朗詠集」(一六四四年、京都大学国文学会)で、次のように述べている。

六種の文献から成る、この版本の書名が、その最初に載せられた「倭漢朗詠集卷之上」によつて呼ばれたのは、落葉集、色葉字集、小玉篇の三部によつて構成された漢字辞書の書名とし



て、最初の落葉集を用いたのと同異曲である。然し、この版本では、タイトルページの中央に全体の書名を掲げると共に、上段にローマ字で ROYEI (朗詠) ZAFI (雑筆) と並べ挙げた点は、落葉集の場合とはちがつて、この書物においては、朗詠集と雑筆抄とが、同等の位置にあることを、特に明示したものである。この事は、別の印刷技術の上にも見られるのである。すなはち、タイトルページに印刷された「倭漢朗詠集」の文字は、朗詠集本文の最初(二丁表)と最後(十六丁裏)とにあるものと全く同一であつて、五字が連続してゐる。また雑筆抄の最初(二丁表)と最後(五丁裏)とにある標題の文字も、同じく三字が連続して居り、大きさも「倭漢朗詠集」と等しい。その「倭漢朗漢集」の下に印刷された「巻・之・上・終」はそれぞれ単独活字が使つてある。書名に大字を連続した形で表す方法は、一五九九年刊のぎやどべかどるに見られ、ことにその下巻との類似点が高い。(上巻では、巻尾のが小字となつてゐる。)この事を見ても、朗詠集と雑筆抄とが同等に位置づけられてゐて、その他の、小字すなはち本文と同じ大きさの活字で標題が掲げてあるものとの間に差等のあることが推察される。

要するに、扉中央には縦書きで「倭漢朗詠集卷之上」とあること、ただし「倭漢朗詠集」は活字が連続しているのに、「巻之上」の三字は単独活字であること、一方、扉上部には左に「ROYEI」(朗

詠)、右に「ZAFI」(雑筆)とあること、どれを重視するかで、判断が揺れているわけである。しかしながら、いずれにせよ、キリシタン版において、扉のタイトルが必ずしも書名とは言えないことは既に見てきたとおりである。本書の六文獻は、当時の「読み本を主として習字の手本の用途」をも兼ねたものと見られ、しかもそれぞれ独立した丁付けにもなっており、そういう点では六篇はほぼ対等に扱われていると見做すことができる。また、本書第一篇目の「倭漢朗詠集卷之上」が、「倭漢朗詠集」の伝本の上巻部分のみ取り上げたものであることが明らかになっているうえに、「九相歌并序」以下の篇が「倭漢朗詠集」の下巻に対応するものでもないからには、扉の「倭漢朗詠集卷之上」は篇名に留まるものと解すべきであろう。ちなみに、上巻、下巻を別冊にして刊行された「ぎやどべかどる」(一五九九年)には、上巻の扉には「GVIA DO PECADOR」(ぎやどべかどる)、下巻の扉には「GVIA DO PECADOR」(ぎやどべかどる)、中央に「きやどへかどる」(ぎやどべかどる)とあり、扉は、「上巻」の文字が存しないのである。むしろ、「ぎやどべかどる」の「下巻」の扉の上部に著されたローマ字の表記の書名のあり方、すなわち図案を中心にして「GVIA DO」と「PECADOR」とが分かれたれているありようは、本書扉上部の「ROYEI」と「ZAFI」の配置と酷似してゐる。本書においては、「倭漢朗詠集卷之上」と「雑筆抄」とが中心であることが示されているといふより、むしろ、この配置は、「朗詠雑筆」という書名が提示

されていると解すべきではなからうか。とすれば、本書『朗詠雜筆』の扉は、次元においてもその上名称としても異なるタイトルが共存していることになり、まさにそういう意味で一書全体の扉と第一篇の扉とが兼用されているわけである。

したがって、『字書類聚』の扉の上のタイトル「RACVYOVX」が第一篇の篇名であることは十分ありうることなのである。

最後に、『字書類聚』の「序」に「仍此一冊を落葉集と号す」と記されている問題を取り上げることとする。

この「序」では、字訓引篇については、「今一篇のいろはをついづる者也」と述べ、 $\text{〃}$ 一篇 $\text{〃}$ と数えている。助数詞の「篇」は、例えば、『日葡辞書』に、

Pen. Amu. Capitulo, parte, ou paragraho da lingua escrita, livro. *o. c.* (訳) ヴム。(編む) 文書や書物などの章、部、または節。

とあるように、一般に書物の構成部分を数える単位を思われるが、『日葡辞書』「補遺」では、「一篇」を

Ippen. *Modo de contar partes, ou tratados de livros.* (訳) 書物の部や巻を数える言い方。

と説明し、また「一冊」を

Issat. *Modo de contar partes, ou tratados dalgum livro.* (訳) 一冊ある書物の部や巻を数える言い方。

と言ひ、殆ど同様の叙述内容になっている。もちろん、「一冊」は書

物の単位として、「一篇」は書物内の部分の単位としてその違いが明確な場合もあろうが、同義的な使用の可能性が示唆されていることは認められる。実は、字訓引篇については、子細にみると、 $\text{〃}$ 今一篇 $\text{〃}$ と述べており、「落葉集」の $\text{〃}$ 此一冊 $\text{〃}$ と対を成すべく $\text{〃}$ 一篇 $\text{〃}$ が用いられているのは間違いない、その点からも、字音引篇と字訓引篇とは対等と見做すことができるのである。『字書類聚』には現存版本に先だって印刷されたと思しい断簡二枚の存在が知られているが、現存版本との対比から、第一次の組版の際には、字音引篇の本文の前に「数行分の余地があり得た」と推測され、「現在タイトルページの裏面にある序が、初めには小玉篇の序と同じ体裁で、本文の直前のその部分に印刷された」とも考えられる。とすれば、分量から見てもその序は、字音引篇つまり、「落葉集」のためのみの序であったに違いない。第一次の組版の解体は、字音引篇だけの刊行予定が、字音引篇、字訓引篇の二篇所収の出版に、組版に着手して間もなく変更となり、「序」の書き換えをせざるを得なかったからではなからうか。その際、字音引篇自体の新しい解説は旧解説に手を加える程度のものであったために、 $\text{〃}$ 此一冊 $\text{〃}$ という表現が残ったというのではなからうか。であれば、 $\text{〃}$ 此一冊 $\text{〃}$ という表現は新たな序の文脈において、旧序とは異なる意味を担わされたということにならう。

#### 四 おわりに

以上の検討によって、所謂『落葉集』と呼び慣してきたキリシタン版の漢字辞書について、その呼称が適切とは言いがたいことが判明したと思われる。

このキリシタン版『字書類聚』では、字音引篇の「落葉集」と字訓引篇の「色葉字集」、さらに字形引篇の「小玉篇」がほぼ対等の関係にあることを、扉裏面の「序」や「小玉篇」のための序、及び構成内容の考察によって確認し、字音引篇を「落葉集本篇」「本篇」と呼ぶことの不適切なことも明らかにした。また、キリシタン版の扉のタイトルが、必ずしも書名ではなく、篇名の提示になっている場合もあり、『字書類聚』の扉のタイトルが「PACVYOVV」(落葉集)であることが書名の根拠とはならないことも明らかにした。さらに、「序」に存する、『落葉集』に対する『一冊』の表現が、字訓引篇に対する『一篇』と実際には対を成していることから、『落葉集』と「色葉字集」との対等の関係を示しており、そして、『落葉集』に対する『此一冊』の表現は、先行断簡と現存版本の対照によって、『序』は当初字音引篇のみのものとして用意されたものの、字訓引篇をも対象とするものに変更になり、その際、字音引篇を解説した部分はまだ手を加えられずに、その結果そのまま残ったものと推測することができた。

キリシタン版の種々の書物において、扉や序のありようは、書名

を特定するための重要な拠となるものであるが、印刷途中ですら行ったと想定される出版方針の変更などの影響もあって、扉は、所収第一篇の扉に過ぎない場合や、一書全体の扉と第一篇の扉とがいわば二重写しのような状態で兼ねていることもあり、序については、次元の異なる序が追加されたり、既述の内容を残しつつの書き換えが行われたと推測される場合があるわけである。『字書類聚』の字音引篇を「本篇」と呼んだのは、少なくとも本書においては、そのような、扉や序のありようを、表層的に捉えることによってなされた誤認定であったと言えよう。

注1 土井忠生「四 落葉集」の「五 附録」(『吉利支丹語学の研究 新版』(一九七一年、三省堂))

注2 井上章「『天草合本』成立過程の一考察」(『国語学』研究) 21 一九八一年十一月)では、この書を便宜的にはあるが、『天草合本』と呼んでいる。

注3 土井忠生「倭漢朗詠集卷之上 解題」の「(四) 版本の性格」(『慶長五年耶蘇会板倭漢朗詠集』(一九六四年、京都大学国文学会))

注4 土井忠生「四 落葉集」の「六 版本以前の印刷物」(『吉利支丹語学の研究 新版』(一九七一年、三省堂))

〈うるし〉さまさと・本学教授